



「小旗を振って、雨の広坂通りを行軍する学生さんを見送りましたよ。生きて帰って来てほしいという願いを込めて」。石川県立金沢第二高等女学校（現金沢桜丘高校）の三年生だった吉村孝子さん（へも）が言う。

昭和十八（一九四三）年十一月、冷たい雨が降る中、第四高等学校の校庭で四高、金沢医科大学、金沢高等工業学校、石川師範学校の学生たちが集まった出陣学徒壮行会。師団長があいさつし、師範音楽隊が「敵は幾万ありとても」を演奏する中、学生たちが行進した。彼らを見送ったのは、吉村さんら女子学生をはじめ国民学校の児童ら。市民を含めて二万人に及んだという。ゲートルを巻いた学生服の学生たちが第九師団の営門をくぐったのは十二月一日であった。

この年十月、東条内閣は在学徴集延期臨時特例を公布。これは理工系と、教員養成系を除く文科系の高等教育諸学校の在学生の徴兵延期措置を撤廃するもので、兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する二十歳以上の文科系学生を在学途中で徴

① 縁者を探す

早瀬 徹

兵したのである。この公布・施行と同時に臨時徴兵検査規則が定められ、十月と十一月に徴兵検査を実施し、十二月に入隊させることとなった。これが第一回学徒兵入隊である。

金沢での学徒壮行会に先立って出陣し、その後、特攻で亡くなった石川師範学校の学生の中に朝倉正一さん、土山忠英さんがいる。師範学校の同級生だった

はやせ・とおる 著述
業。金城大短期大学部非常勤講師、「桜坂」同人。二〇〇六年には日本海文学大賞北陸賞、ちよた文学賞優秀賞に相次いで選ばれている。石川県能美市在住。

戦に出されし吾等の青春」

父のクラスの級長だった朝倉正一さんは、海軍の航空予備学生を志願し、学徒出陣前に入隊。昭和十八年卒業組の本科一部の学年で、卒業式の前に海軍航空予備学生に志願したのは総



石川師範学校の学帽（石川師範学校本科一部のアルバムより）

若者動かしただ力とは

勢二十六名のうち七名であったという。

この海軍予備学生十三期こそ、生還の見込みがない特攻隊（特別攻撃隊）の中心となった

戦闘員たちである。彼ら学徒出陣による者は予科練や海軍兵学校を出た者よりも圧倒的に特攻要員となる率が高かった。飛行機の操縦に関して物覚えがよく、短時間で熟達したからだ。敵戦闘機と戦う操縦法というより、爆弾を抱いて敵艦にぶつかり当たるだけの操縦を繰り返して学ばされたといえる。

父の三人目の学友、珠洲出身の学友であるHさんは横須賀航空隊に入り、練習機を操縦して

のだろうか、志願することが家族の悲しみにつながると思わなかったのか。見えない力が彼らを動かしていたのではないのか。

戦後生まれの私には、当時の時代状況を体験していないだけにわからない。遺影は何も語りかけてくれない。自分が選んだ教師への道を自ら捨て、後世に生きる私たちに何を教えようとしたものだろうか。振り返って、海軍航空予備学生に志願した若者の気持ちを押し量るために、特攻で戦死した朝倉さん、土山さんのおのの縁者を探し求めることから始めた。

石川師範学校本科1部・昭和18年卒業組の場合

た亡父は、私に折々にこの二人のことを話してくれた。父は小耶馬の名で、昨年八月に出した歌集にも家族への思いを残して戦に出る防人の悲しい心を詠んでいた。

「我が学友も並びて出るか」と神風の特攻写真のテレビ見つけ

る」



土山忠英さんの遺書の一部（遺族提供）